

### Ⅲ. 教育実践総合センター教員からのメッセージ



## 子ども理解に資する二つの力： 「新たな知識を創造する力」と「学びに向かう力」

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 中山 玄 三

2017（平成29）年度の学生の活動報告と連携協力機関関係者のコメントをもとに、エスノグラフィーの手法により、学生が体得した子ども理解に資する力について特筆してみたい。

まず、子ども理解に資する力の一つ目として、『新たな知識を創造する力』を挙げたい。今年度のメイクフレンズの学生は、答えは1つではないという相対主義および最適解を見つけ出すという評価・構築主義の知識観のもとで、子ども理解に関する知識を創造できたといえる。それは、「子どもの同じ反応でも、学生によって感じ方が変わるため、それを共有することで、自分の持っている子ども理解という知識を常に修正・追加・更新することができ、子ども理解の幅を広げ、深められる。」というメイフレ船長・島村さんの言葉に表れている。これを、熊本県生涯学習推進センター審議員・吉川先生は「創造」の一言でまとめた。

知の創造に必要なこととして、託麻公民館社会教育主事・赤木先生は、「子どもが仲良くなるには班単位の活動がいいという固定観念を破り、全体での活動を支援する。」というように、新たな視点からこれまでの活動の見直しを図った点を評価する。託麻単発班・後期班長の浅井さんは、「全員で遊ぶレクを通して子どもたちの笑顔や元気いっばいな声が響き渡っており、一緒に活動を行ってきた学生も含め全員が楽しく交流している姿が見られた。」というように、有効な支援を見い出せたと振り返る。個人と班、全体の関わりという点から、仲良しを目標の一つに掲げた大江プランナー班・後期班長の太田さんは、「1年間の活動を通して、会議と活動とで班構成を変えたりすることで、班だけでなく全体の仲も深めることができた。」というように、有効な支援を見い出せたと振り返る。その一方、大江単発班・後期班長の米村さんは、「班で仲良く協力しながら活動を楽しめており、達成感を味わうことができていたが、子ども全員で達成感を共有できたのかという点で課題が残った。」と振り返る。このような様々なプラス・マイナス両面の体験を共有することで、やはり単発型と継続型の活動では支援のしかたにも違いがあり、工夫・改善の余地があること、つまり新たな知識を創造することの必要性や可能性に学生が気づくことができたように思われる。

また、さらに、知の創造に必要なこととして、五福公民館社会教育主事・東田先生は、「図工やサイエンスマジックを取り入れたことで、学校での教科の学びにつながるような活動の幅が広がった。」というように、これまでの活動に新たな視点を取り入れた点を評価する。五福ホールB班・後期班長の平山さんは、「活動に入り込めない子どもも、工作を起点として、入り込むことができた。」というように、有効な支援を見い出せたと振り返る。

知の創造に関わる上記の事例にみるように、メイフレが学びの共同体としてこれまで蓄積してきた体験に裏付けられた知識であっても、答えが1つという絶対主義の知識観・固定観念を破り、TPO（Time=時、Place=場、Objective=目的）に応じて知識を常に更新していける。つまりパラダ

イム転換を起こすような、『新たな知識を創造する力』を学生が体得できているといえる。

次に、子ども理解に資する力の二つ目として、『学びに向かう力』を挙げたい。今年度のメイクフレンズの学生は、子ども理解を追究していくための土台となるものとして「関心・意欲・態度」を方針に掲げた。具体的には、「自分が所属する班以外への関心、外部の方から依頼をいただいた多くの活動に積極的に協力しようという意欲、活動をさせていただいているという感謝を忘れない態度を、船員一人一人が意識する。」ということをメイフレ船長・島村さんは呼びかける。これを、熊本県生涯学習推進センター審議員・吉川先生は「自立」と「協働」の二言でまとめた。

学生の関心・意欲・態度の現れとして、託麻公民館社会教育主事・赤木先生は、「自分たちが楽しくないと、子どもも楽しくない。」というように、準備をする本気度を評価する。同様に、大江兼中央公民館社会教育主事・永山先生も、「プレの反省を活かして改善された本番の活動になっている。」と高く評価する。また、東部公民館社会教育主事・深迫先生は、「みんなで考えてやろうとしたことが、機械の調子が悪くてうまくいかなかった。一緒にやった仲間に申し訳ない。」と涙する学生の姿に感動を覚えたという。

関心・意欲・態度は、周知のとおり、今日の教育界では、生きて働く知識・技能および未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等を実践力へと高める力、すなわち学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力』と呼ばれ、重要な資質・能力（コンピテンシー）として位置づけられる。

『学びに向かう力』が表現・創出された事例として、託麻単発班・前期班長の島村さんは、「私たちが予想した子どもたちの姿と実際の子どもの姿が、ずれることがしばしばあった。そのような発見・経験できることを糧にし、これからも活動を企画、運営、振り返りといったサイクルを継続し、学び続けていきたい。」という。中央単発班・後期班長の吉田さんは、「活動を企画・運営して、大変だったり感動したりなどいろいろな感情がある中で、たくさんの学びがあった。この学びを今後のメイクフレンズの活動および教育を考える場で有効的に活用したい。」という。このような学びに向かう力が、多くの学生の声として活動報告の中で散見された。

最後に、熊本県社会教育課審議員（課長補佐）・本村先生から、「メイクフレンズの学生は、ビジョン・プラン・リーダーシップを備えている。」と高い評価を得た。今後とも、一人一人が主体となって、かつ他者と協働しながら、PDCA（Plan=計画、DO=実施、Check=自己点検・自己評価、Action=確認・改善）のサイクルを繰り返し循環させることで、『新たな知識を創造する力』と『学びに向かう力』をより一層高めていくこと、そうして、子ども理解に関する内容と方法の知識をより一層深化・拡充していくことを、メイクフレンズの学生に期待したい。

## 平成29年度フレンドシップ事業シンポジウムに参加して思うこと

教職大学院 シニア教授 長 濱 茂 喜

熊大メイクフレンズの顧問としてメイクフレンズの活動に関わって4年になりますが、いつもわくわくしながら、定例会へ出席し、実際の公民館での活動を参観してきました。

定例会で、学生のみなさんが熱心に班員と議論しながら活動の計画を練り上げている姿、実際の公民館での活動で、子どもたちが主体的、意欲的に活動に取り組んでいる姿、学生のみなさんの活動がより良いものとなるよう、子どもたちと真剣に向き合い、一生懸命関わっている姿が、強く印象に残っています。4年間少しずつメンバーが変わっても、その充実度は着実に深まってきていると思います。確実にメイクフレンズの伝統と実績が引き継がれていることを感じています。

そのような中で、今回のシンポジウムは1年間の活動の集大成の場であったと考えます。活動の実施報告では、島村船長による「活動全体の振り返り」の報告の後、「五福ホールA班」「五福ホールB班」「託麻単発班」「大江単発班」「中央単発班」「大江プランナー班」「東部プランナー班」の7つの班の報告がありました。どの班の報告でも、活動の方針、目標が明確に示され、そのことを達成すべく計画、準備も綿密になされており、子ども達が自ら考え試行錯誤し意欲的に活動に取り組んでいる姿がムービーなどで紹介され、活動の充実ぶりを伺うことができました。活動後には、活動の改善点や課題も明確に示され、更に活動を充実させていこうとする姿勢も感じられました。活動全体を通して、「計画→活動→振り返り→改善」というPDCAサイクルによるマネジメントの手法が貫かれ、今学校現場でも求められているマネジメント力も確実に身につけてきていると考えています。

また、学生の皆さんにとって、このメイクフレンズの活動で得たものは他にもたくさんあったと思います。「子ども理解」はもちろんのこと、コミュニケーションスキル、企画・実践力、チームで協働する力等についても確実に向上が図られたものと考えています。今後も、社会人としても教師としても求められるこれらの力を、一層伸ばして行って欲しいと願っています。

それから、このシンポジウムには、教育学部の先生方はもちろん、県、市から多くの関係者の方々も出席されていました。メイクフレンズの活動の素晴らしさを十分認識して頂いたのではないのでしょうか。特に各公民館の担当の社会教育主事の先生方からは、今後の励みになるような総括的なコメントをいただき大変ありがたく思いました。感謝申し上げます。

最後に、メイクフレンズのよき伝統が引き継がれ、活動が益々ステップアップしていくことを願っています。

2017（平成29）年度 熊本大学教育学部  
フレンドシップ事業実施・成果報告書

2018（平成30）年3月31日

編集・発行 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター  
〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5番12号  
TEL(096)325-3282 FAX(096)352-3468

印 刷 かもめ印刷